

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13321

研究課題名(和文) 身体・意味・時間：後期レヴィナス哲学の再検討

研究課題名(英文) Body, meaning, time: reexamination of the late Levinas

研究代表者

渡名喜 庸哲 (TONAKI, Yotetsu)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40633540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランスの哲学者であるエマニュエル・レヴィナスの第一の主著『全体性と無限』(1961年)から、第二の主著『存在するとは別の仕方』(1974年)まで提示される思想の意義の解明にある。これまでレヴィナス哲学とは、「他者」の「顔」に対する「私」の「責任」という考えを軸にする「倫理」思想だと解されてきた。しかし、少なくとも公刊著作および未公刊資料の読解から明らかになるのは、ハイデガー思想の批判的読み替えという企図のもと、身体論、意味論、時間論という三つの観点から、「人間」概念を提示することが中心課題だったということである。本研究は、論文・著書の公刊を通じて、この点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はエマニュエル・レヴィナスの思想の哲学的な意義を明らかにすることを目指したものである。レヴィナスの思想は、哲学・倫理学分野だけでなく、社会学・人類学・法学・政治学・文学・社会福祉論・ジェンダースタディーズなど様々な関連領域の研究に影響をもたらしており、また一部の一般の読者にも受け入れられている。本研究は、『レヴィナス著作集』に納められた草稿や講義録などの新資料を活用して、レヴィナスの思想の形成およびその特徴について、はじめてその全容を明らかにするものであり、これまでの研究に欠けていた理解を補うものである。

研究成果の概要(英文)：This study seeks to clarify the essential point of E. Levinas' philosophy, by examining his two major books, Totality and Infinity (1961) and Otherwise than being (1974). We often considered his philosophy as "ethical" thought which highlights the "responsibility" of "I" toward the "face" of "other". Nevertheless, our reading, based on his unpublished materials as well as published texts, has pointed out that his philosophy seeks to elaborate a new understanding of "being" of "human", through a permanent conversation with Martin Heidegger' ontology.

研究分野：哲学、現象学

キーワード：レヴィナス ハイデガー フッサール 現象学

1. 研究開始当初の背景

私は、これまで数年来エマニュエル・レヴィナス哲学の研究を行なってきた。なかでも、「破局」と「共生」という観点からレヴィナス哲学を再読する試み(2012年-13年スタート支援)、現代フランス倫理学の流れにおけるレヴィナス思想の意義の解明を目指した研究(2014年-16年若手B)を通じ、レヴィナスに関する一次・二次資料の収集を行ない、国内外の研究者との連携を経て、下記研究業績に記した研究成果を公表してきた。近年はさらに『レヴィナス著作』に収められた未刊資料の翻訳やレヴィナスに関する評伝の翻訳など、一次資料や基礎文献の整理にも携わってきた。

以上の成果にもとづいて、本研究が目指すのは、1961年公刊の第一の主著『全体性と無限』から、レヴィナスの晩年の主著『存在するとは別の仕方』(1974年公刊)にいたるまで提示される後期レヴィナス思想の意義の解明にある。これまで、レヴィナス哲学とは、「他者」の「顔」に対する「私」の「責任」という考えを軸にする「倫理」思想だと一般に解されてきた。しかし、少なくとも公刊著作および未公刊資料の読解から明らかになるのは、そのような「他者の倫理」よりもむしろ、ハイデガー思想の批判的読み替えという中心的企図のもと、身体論、意味論、時間論という三つの観点から、「存在」概念の改鑄を経た「人間」概念を提示することが中心課題となっていたということである。実のところ、レヴィナス哲学を「他者の倫理」に還元せず存在論の改鑄として哲学的に解釈しようとする試みは、フランス語圏をはじめとする現在の国際的なレヴィナス研究で徐々に認められつつある見地だが、とはいえこのような展望のなかで後期レヴィナスを主題的に扱った研究はいまだ見られない。とりわけ、後期レヴィナスに関するこれまでの研究は、1964年のデリダの論文「暴力と形而上学」の影響を重視し、それによりレヴィナスの前期と後期のあいだにある種の思想の「転回」があったとする解釈が大勢を占めていたが、今日の研究が認めるように、このような解釈は資料的にも裏付けのあるものとはいええず再考の余地が多いに残されている。

他方で、(とりわけ英語圏の)応用哲学の分野では、レヴィナス思想に対する関心はこれまで以上に高まっているが、肝心のレヴィナス思想の理解に不十分さが見られるため、有効な接続がなされているとは言いがたい。レヴィナス研究を狭義の思想研究に限定せず他領域に開いてゆくためにも、こうした連携はいつそう求められているが、それをより実効的に行なうためにも、最新の資料および研究状況を反映した再解釈が待たれている。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスについて、研究代表者がこれまで遂行してきたその前期思想に関する研究の成果に基づいて、解釈学的視座および応用哲学的視座の双方から、いわゆる後期レヴィナスの思想の哲学的意義を解明することを目的としている。とりわけ、「身体」「意味」「時間」の三つの主題をその思想の中心軸と捉え、それらについて、最新の資料に基づき、現代哲学の議論と対照させて検討したうえで、最終的に、これらの点が後期レヴィナスの中心課題である「人間」概念の練り上げへと結びついていることを示す(解釈学的視座)。さらに、現代の科学技術論における「人間」概念の変容との比較から、こうしたレヴィナス思想の具体的・実践的な意義をも提示することを目的とする(応用哲学的視座)。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に哲学倫理学研究として、一次資料および二次文献の読解に基づき、レヴィ

ナスおよび現代哲学全般についての新たな解釈を提示する。主題に応じ、現代哲学および技術科学論との対照を行なう比較思想的アプローチを採用する。具体的には以下の通り。

(1)レヴィナスの身体論についての研究 2017年度(本研究1年次)は、上に記した研究主題のうち、とりわけレヴィナスの身体論についての研究を集中的に行ないその成果をまとめる。この観点では、第一に、後期レヴィナスを特徴づける新たなフッサール解釈が鍵となる。この点で、フッサールの著作(とりわけキネステーゼ概念に関わるもの)の精読、および関連する先行研究(Murakami, 横地等)の精読を続ける。第二に、フランスでC.ペリュションが精力的に展開する「糧」概念についての哲学的研究は、「糧」および「享受」を重視するレヴィナスの身体論にとってもきわめて重要である。国外出張の際に意見交換を行ない本研究に生かしたい。

(2)レヴィナスの意味論についての研究 2018年度(本研究2年次)の第一の課題は、上に記した研究主題のうち、とりわけ意味論に関する研究を進めることにある。「他者」をめぐるレヴィナスの議論の焦点はむしろ「意味」の生成をめぐる問題系にあると考えられる。この点については、近年の英語圏のレヴィナス研究で強調されるように、レヴィナス哲学をウィトゲンシュタイン、フッサール、ハイデガーの哲学と対照させる必要がある。とりわけ、北欧の研究者S.オーアゴの研究はこの点で注目すべきものであるが、そうした最新の研究状況を反映させ、レヴィナスの「他者論」を「意味論」として読み替える見地を提示する。

(3)レヴィナスの時間論についての研究 2018年度(本研究2年次)には、さらに上に記した研究主題のうち時間論についても研究を進める。この点については、レヴィナス自身の発言に従い、F.ローゼンツヴァイクの『救済の星』、H.ベルクソンの『時間と自由』、M.ハイデガーの『存在と時間』を主たる参考文献とし、彼らの時間論との分析を行ないつつ、『存在するとは別の仕方です』『観念に到来する神について』等の後期レヴィナスの重要著作の精読を行なう。

(4)レヴィナスの「人間」概念についての研究 2019年度(本研究3年次)には、以上の主題を、後期レヴィナスにおける「人間」概念の再検討という角度から総括し、同時にその具体的な意義を多角的に検討する。具体的には、レヴィナスのいう「人間」とは、大文字の「他者」として表象不可能・到達不可能にとどまる理念ではなく、きわめて具体的な人間の存在様態を狙ったものであると考える。その意義は、現代哲学(とくに科学技術論・人間工学に関わる分野)で進められる「人間」概念の変容に照らすことでいっそう明らかになると考える。この点について、第一に、ベルギー・ブリュッセル自由大学のG.Hottoisを中心とする哲学研究チームが実施している「トランスヒューマン」をめぐる技術哲学的解釈、第二に、D. Gunkel, L. Intron, N. Toivakainenが行なっている「人間」-「機械」をめぐる哲学分野での人間工学的研究はとりわけ参考になる。これらの研究者との連携を深めつつ、レヴィナスの「人間」概念の哲学的意義を総合的に明らかにする。

4. 研究成果

本研究の目的は、上記のとおり「身体」「時間」「意味」という三つの観点から、レヴィナスの哲学の意義を「人間」概念の再検討という大きな主題のもとで描き直す点に向けられていた。当初の予定では、こうした主題こそ、いわゆる「後期」レヴィナスを特徴付けるものであるとの目論見のもと研究を進めてきたが、その過程でこうした主題は、『全体性と無限』という第一の主著がその全体においてすでに追跡しているものであることが明らかになった。そのため、本研究期間中においてはまず、いわゆる「中期」レヴィナスを代表するとされる『全体性と無限』およびそれに至るレヴィナスの思想形成に焦点を当てた研究を遂行し、その成果を単著『レヴィナスの企て』『全体性と無限』と「人間」の多層性』にまとめた。本書は、国内のレヴィナス研究に

とって、従来の解釈の刷新を迫るインパクトを有する。

他方、本研究の計画のうち、「身体論」に関しては、フランスにおいて現在レヴィナス研究を主導するコリーヌ・ペリュション氏と知己を得、研究協力体制を構築することができた。また、2019年には、レヴィナスに関する国際シンポジウムを日本国内で開催し、本研究の一部をフランス語で発表した。その他の主題についても、レヴィナス協会をはじめとする国内学会組織において継続的に研究を進めることができた。

本研究は、最終年度と予定していた2020年度末に新型コロナウイルスの影響で予定していた海外出張が取りやめになるなど、当初予定していた計画のうちいくつかは実現することはできなかった。ただし、遠隔通信技術によって、海外の研究者との意見交換も行うことができた。

今後は、本研究において得られた知見を公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 1
2. 論文標題 「イリヤとエロス 『レヴィナス著作集』から見えてくるもの」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『レヴィナス研究』	6. 最初と最後の頁 8-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 47巻6号
2. 論文標題 「ドローン」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡名喜 庸哲	4. 巻 135
2. 論文標題 「クロード・ルフォールとピエール・パシェ 抵抗の場としての内密性」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『文芸研究』（明治大学文学部文芸研究会）	6. 最初と最後の頁 221-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡名喜 庸哲	4. 巻 別冊
2. 論文標題 「カタストロフ前夜のシモーヌ・ヴェイユ」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『別冊水声通信 シモーヌ・ヴェイユ』	6. 最初と最後の頁 112-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yotetsu Tonaki	4. 巻 1058-1059-1060
2. 論文標題 "Gunther Anders et le Japon. Penser le post-humain"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Europe	6. 最初と最後の頁 267-280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 巻 49 (1)
2. 論文標題 「遠隔と接触：リモート時代におけるレヴィナスの「顔」」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 120-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Yotetsu TONAKI
2. 発表標題 "Teletechnologie et hantologie : de Levinas et Derrida"
3. 学会等名 International Conference "Derrida et la technologie / Derrida and Technology", Columbia Global Centers / Paris (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yotetsu TONAKI
2. 発表標題 "Levinas et une pensee extreme sur l' Orient : en reponse a la critique de J. Butler"
3. 学会等名 Colloque international Le singulier et l' universel Levinas et la pensee de l' Extreme-Orient (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「基礎存在論は（どの意味で）基礎的か？峰尾公也『ハイデガーと時間性の哲学』（溪水社、2019）に寄せて」
3. 学会等名 ハイデガー研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「ジェラルド・ベンクスーサン『メシア的時間』の意義」
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会ジェラルド・ベンクスーサン『メシア的時間』翻訳出版記念講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yotetsu Tonaki
2. 発表標題 "Gunther Anders or transformation of "human" after Hiroshima"
3. 学会等名 Convegno Internazionale Il nucleare, una questione scientifica e filosofica dal 1945 a oggi, Sapienza Universita di Roma（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡名喜庸哲
2. 発表標題 「イリヤとエロス：『著作集』から見えてくるもの」
3. 学会等名 2018年度レヴィナス研究会大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TONAKI Yotetsu
2. 発表標題 Mais qui aurait vu la fin du monde ? Des catastrophes differees et la catastrophe accomplie
3. 学会等名 La catastrophe devant soi. Enjeux ethiques, questions politiques (Columbia Centers Paris) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TONAKI Yotetsu
2. 発表標題 Le corps transparent d'un traducteur
3. 学会等名 Colloque international, Corps et message: de la structure de la traduction et de l'adaptation (Universite de Strasbourg) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「ラディカル無神論」は無神論たりえるのか ヘゲルンドのレヴィナス解釈批判を通じて」
3. 学会等名 脱構築研究会ワークショップ「ラディカル無神論」以後の現代思想」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「レヴィナス以降の フランス・ユダヤ 菅野賢治『フランス・ユダヤの歴史』合評会」コメント」
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会東京大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「多かれ少なかれユダヤ的であること」
3. 学会等名 シンポジウム「デリダと宗教的なもの」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「エロス、文学、災厄：パタイユ、レヴィナス、ナンシー」
3. 学会等名 ジョルジュ・パタイユ生誕120年記念国際シンポジウ（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡名喜 庸哲
2. 発表標題 「遠隔時代における身体：シャマユール/レヴィナスとともに」
3. 学会等名 日仏哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 ジェラルド・ベンスーサン（渡名喜庸哲・藤岡俊博訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 330
3. 書名 『メシアの時間 歴史的な時間と生きられた時間』	

1. 著者名 グレゴワール・シャマユー（渡名喜庸哲訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 『ドローンの哲学 遠隔テクノロジーと 無人化 する戦争』	

1. 著者名 エマニュエル・レヴィナス（渡名喜庸哲・藤岡俊博・三浦直希訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 458
3. 書名 『レヴィナス著作集3 エロス・文学・哲学』	

1. 著者名 渡名喜庸哲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 528
3. 書名 『レヴィナスの企て』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Colloque international Le singulier et l'universel Levinas et la pensee de l'Extreme-Orient	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------